



テトラクリスタルアイランド

ストレンジャー達四神が暮らす平和な島、テトラクリスタルアイランド。

時刻はまだ夜明け前の朝。

ストレンジャーやアルドール、島の住人達はまだ夢の中。

それぞれが自分達の寢床に入りスヤスヤと寢息を立てていた。

そんな島の近くにある海上の空に一つの影が。

影は翼も羽も無い状態でまっ逆さまに海へと向かっていた。

ドッポーン！！

空から降って来た影は特に身動きもせず、重力に身を任せて海へと転落した。

そして自然に海へと浮かび上がり、波と共に海の上を進んでいった。

その姿は、黄色い布を腰に巻きつけた狼だった。

そんな事が朝方に起こっているとも知らず、テトラクリスタルアイランドの住人達の起床時刻が太陽と共にやってきた。

「うーん。」

今日一番に起きたのは、珍しくストレンジャーではなくビリーブだった。

目が覚めたビリーブは寢床から起き上がり、ストレンジャーを起こさないように歩きつつ窓へ。

本日もいい天気、空には雲が無く快晴であった。

「風が気持ちいい・・・」

ビリーブは島に吹いてくる風を肌で感じつつ外の風景を見た。

すると島の海岸に一つの影が。

「？」

ビリーブは近くにあった双眼鏡で海岸を見た。

するとそこには人が倒れていた。

「！ 大変！！」

ビリーブは急いで下駄を履き、外へ飛び出していった。

ビリーブが走って人影がいた場所に向かうと、体を半分海に浸けてうつ伏せで倒れている人影がいた。

体は灰色で、下半身には黄色い布地を巻きつけていた。

「あ、あの大丈夫ですか！？」

ビリーブは倒れていた人のそばに座り、体を揺すりつつ問いかけた。

だが特に反応は無く、倒れたままだった。

「ど、どうしましょう・・・」

ビリーブは少々戸惑いつつ考えていた。

「どうしたんだー？ ビリーブ。」

ビリーブが海岸で一人戸惑っていると、起きてきたストレンジャーがこちらに向かって飛んできた。

「あ、ストレンジャーさん！ ここに負傷者が！！」

「なんだって！？」

ビリーブはストレンジャーの姿を確認するとストレンジャーに現時点で起こった事を報告をした

。
ストレンジャーは海岸に降りつつ倒れている人の元へ。
倒れていた人は意識は無いものの、呼吸はしていた。

「死んではないいな。 部屋に運ぶぜ。」

「わかりました。」

ストレンジャーとビリーブは海岸に倒れていた人を、家へ二人で運んでいった。

部屋へ運び終わると、海水を吸っていた布を取り、ストレンジャーのベットへ寝かせた。
ビリーブは布地が含んだ海水を搾り出し、洗濯した。
ストレンジャーは負傷者のそばで目が覚めるのを待っていた。

「ストレンジャーさん、洗濯終わりました。」

ビリーブは洗濯を終えると、部屋に戻ってきた。

「ありがとう、ビリーブ。」

「まだ目を覚ましませんか？」

ビリーブはストレンジャー同様に負傷者のそばへ行き、様子を見た。
ベットに入ったまま、目を閉じていた。

「海岸に倒れてたからな、何があったんだろう。」

ストレンジャーは少々不安そうに言った。

「起きたら事情を伺いますか？」

「いや、しばらくしてからでいいよ。 急に聞いたら相手も困るだろうから。」

「わかりました。」

「うーん。」

二人が会話をしていると、眠っていた負傷者が目を覚ました。

「あ、起きました。」

二人は負傷者のそばに寄った。

ベットに寝ていた負傷者は目を擦りつつ、辺りを見回した。

「ここは・・・」

「大丈夫ですか？」

「！！」

目を覚ました負傷者に、ビリーブは問いかけた。

だが負傷者は二人を見ると、表情を変えた。

「え？ えええ！？」

負傷者は驚きを隠せず、再び辺りと体を見た。

「大丈夫か？」

ストレンジャーは再び負傷者に問いかけた。

「う、嘘！？ どうして??」

負傷者はベットから出ると、部屋に立った。

その姿は全身灰色の狼だった。

手袋はしておらず、黒のラインが入った白い紐靴を履いていた。

瞳は綺麗なベルミリオンアイ(朱の瞳)だった。

「あの・・・」

「ス、ストレンジャー君！！」

狼は再び表情を変え、今度はストレンジャーに抱きついた。

ガシッ！

「うわ！ な、なんだ！？」

「本物だ～☆」

狼はそう言いつつストレンジャーに抱きついたまま言った。

「ストレンジャーさん、知り合いですか？」

現在起きている光景を見つつ、ビリーブは問いかけた。

「い、いや。俺は知らないぜ??？」

「あ！ ビリーブもいる☆」

ガシッ！

狼はそう言うと、今度はビリーブに抱きついた。

「うわあ！」

「な、なんだ??？」

二人は狼の起こす突拍子も無い行動に驚きつつ立ちすくんでいた。

暴走狼

そしてしばらく狼が好き勝手行動して数分・・・

「・・・そろそろ聞きたい事がたくさんあるんだが、もういいか？」

しばらく狼が好き勝手行動していると、ストレンジャーは問いかけた。

「あ！ ご、ごめんなさい。 つい行動を乱しちゃった。」

狼はそう言うと、ビリーブから離れ、ベットへ腰掛けた。

「で、なんですか？」

狼は依然として楽しそうな表情をしつつ、ストレンジャーを見た。

「率直に聞く。 おまえ何者だ？」

ストレンジャーはさすがに遠まわしには出来ず、率直に聞いた。

「あ、はい。 自分はラブソディ・ウルフと言います。 スtrenジャー君。 ビリーブさん。」

ラブソディと答えた狼はストレンジャー達を見つつ言った。

「なんで俺たちの名前を知ってるんだ？」

「信じてもらえるかわかりませんが。 それは、ストレンジャー君達のマスターですから。」

「マスター！！??」

二人はラブソディの言った事に耳を疑った。

「ええっと、マスターって事は。 主人なんですか？」

「はい。 もっと簡単に言うと、生みの親です。」

「生みの親って。 俺達には母親がいるんだぜ？」

ストレンジャーは現時点で隣の部屋に寝ていると思われる母龍の事を思い浮かべつつ言った。 ビリーブも同様に母親を考えていた。

「確かに普通に言ったら母親が生みの親ですね。 でも、自分がこの世界を作り、皆さんを作った張本人です。」

ラブソディは少々説明に困りつつ言った。

「世界？」

「はい。」

ラブソディはベットから立ち上がり、二人を見た。

「本当の姿は人間ですが、この世界では自分はこの姿なんです。 . . . あれ？ 布が無い。」

ラブソディは自分のスタイルを見つつ言った。

「あ、布地でしたら海水をたっぷり吸っていたので洗濯しました。」

「そうでしたか。 どうもすみません。」

「多分もう乾いていると思うので。 取ってきますね。」

ビリーブはそう言うと、ひとまず布地を取りに部屋を後にした。

「で、ラブソディとかいったな。 説明、出来るか？」

「あ、はい。」

ラブソディと二人きりになったストレンジャーはとりあえず、聞ける情報を聞いた。

「自分は、この世界を作る前に一つの存在を創りました。それがストレンジャー・ザ・ドラゴン。 貴方です。」

「俺が最初に、つくられた？」

ストレンジャーは驚きを隠さず言った。

自分が作られた存在だということに。

「はい。 誰しも作られた存在として人間でも獣でも世界に立っています。 その作った張本人がいわゆる神と言える存在。 で、ストレンジャー君たちからみた神が自分、ラブソディです。」

「じゃあ俺の前に立っているのが、俺のことや、ビリーブ達を作り出した神なのか!？」

「そのとおりです。」

ラブソディは言った。

普通に考えたらありえないことでもある。

自分の目の前に神が立っているのだから。

「本来、神となんて合うことが出来ません。 ですが自分は、『夢』という力を使って、皆さんの前に現れただけです。 皆さんからみたら、現実なんですけどね。」

「じゃあお前は今、夢を見てるってことか。」

「はい。 ですから本来の姿ではなく、偽りの姿であるラブソディ・ウルフなんです。」

ストレンジャーの前でラブソディは1回転した。

ふわふわの尻尾が、少々遅れてラブソディの回転についていく。

「皆さんは自分から見たらオリジナルキャラクター。 作られた存在です。 もちろん、ソニックやテイルスさん達。 ピーチ姫やフォックス達もそうです。」

「俺たちは皆作られた存在か。」

「世界に住んでいる方々はみんなそうです。 母親という存在から作られた存在。 作られていない存在なんてむしろいません。 もちろん自分もです。」

ラブソディは一通りの説明を終えた。

「とりあえず、ご理解いただけましたか？」

「ああ、大体な。 この世界も作られたものだったのか。」

ストレンジャーは家や外の風景を見つつ言った。

「でも良かった。自分の考えた存在の性格が同じで。違ったらどうしようかと思いました。」

ラブソディはストレンジャーを見つつ言った。

「神は何でも出来る。性格もそうなんじゃないか？」

「でも気になる点はいくらでもあります。悩みは尽きません。」

ラブソディはストレンジャーの周りを回りつつ言った。

角度を変え、自分の作り出した存在であるストレンジャーをまじまじと観察していた。

「俺の身体能力もそうなのか？」

「そうですね。全部はコントロール出来ませんが、元となるデータは全部自分が作りました。

自由に生きていただけるだけの元を。」

「性格、身体、行動、能力。何でもありだな。」

ストレンジャーは自分の手を見つつ言った。

「・・・もう我慢できない！！」

ガバッ！！

「うわっ！」

そう言うと再びラブソディは背後からストレンジャーに抱きついた。

「もう自分の作り出した存在だから自分好み過ぎてもうダメ！！ カッコよすぎる—————！！！」

ラブソディはストレンジャーの体にくっつき、嬉しそうに言った。

「おいおい、とりあえず急に来るのだけはやめてくれ。 結構体に来るんだから。」

「あ・・・ご、ごめんなさい。」

ラプソディは再び正気になると、ストレンジャーから離れた。

「実際に合うと、やっぱりかっこいいな～ スtrenジャー君。」

ラプソディは少々後ろへ下がり、ストレンジャーを見つつ言った。

目はキラキラと輝いており、本当に嬉しそうだ。

「そうなのか？」

「そうだよ。 最初に作った存在なだけはあるね。 種族もマル！ スタイルもマル！！ 性格もマル！！！！ おまけにカッコかわいい！！！！」

ラプソディはストレンジャーにグットサインをだしつつ言った。

「あ、でもせっかくこうして合えたんだし、皆に合いたいなー あってもいい？」

ふと思いつき、ラプソディはストレンジャーに提案した。

「まあ別に。 マスターの作った世界なら誰とでも会えるしな。 夢が終わる前に存分に楽しめよ。」

「はい。 ではそうさせてもらいますね。」

ラプソディは笑顔でストレンジャーに言った。

「お待たせしました。」

一通りの騒動が終わった頃、ビリーブが乾いた布地を持って帰ってきた。

「あ、ありがとうございます。」

ラプソディはビリーブから布地を貰い、腰に巻きつけた。

「やっぱりラプソディはこのスタイルじゃなくっちゃね。」

ラブソディは自分の姿を見つつ言った。

「とりあえず出かけるとして、朝ごはん食べてからでもいいか？」

「まだ朝ごはん食べてないんです。」

ストレンジャーはふと思い出し、ラブソディに提案した。

「いいですよ。じゃあ自分は、ちょっとストレンジャー君の花園に行ってきますね。」

「ああ、行ってらっしゃい。」

二人はラブソディを見送ると、朝ごはんを用意し始めた。

「うーん。 やっぱりこの世界はいいなー」

ラブソディは背筋を伸ばしつつ自分の作った世界を見た。

辺り一面自然に溢れ、住んでいる住人たちが皆平和な世界。

それが、ラブソディの求める素敵な世界。

一通り風景を見終え、ラブソディは手に傘を召還した。

「よし、行ってこよっと☆」

ラブソディは傘を開き、風に乗って空へ飛び出した。

上昇気流や風の影響で、ラブソディは傘を差したまま空を飛んでいた。

自分の思い通りになるため、結構楽しそうだった。

「ええっと。 あ、あそこかな。」

ラブソディは森の一角を見つつ言った。

樹が切り取られたようなその場所は、ストレンジャーの花園だった。

ラブソディは傘の角度をずらしつつ、花園へ降りていった。

「うわあー☆ 綺麗！！」

花園へ降り立つと、ラブソディは目の前に広がる小さな花園に咲く花々を見た。見たことのある花から作り出した花まで、綺麗に咲いていた。

「ストレンジャー君、やっぱり毎日世話をしてくれてたんだ。 嬉しいなー」

ラブソディは近くにあったジョウロやスコップを見つつ言った。そして近くに咲いていた水泡草を摘み、息を吹きかけた。

フー・・・

フワフワフワッ

空気が送られた水泡草はシャボン玉を出した。

「わあ、シャボン玉☆」

水泡草からでた泡を見つつ、ラブソディは言った。次から次へと無限に出てくるシャボン玉はとても綺麗だった。

「何者だ？ お前。」

ラブソディが一人花園で楽しんでいると、後方から声がした。振り向くとそこにはコレージが立っていた。

「あ、コレージさん。」

ラブソディは笑顔でコレージに声をかけた。

「？ 何で俺の名前を？」

コレージは自分の見知らぬ存在から名前を言われ、少々疑問に思った。

「多分、もうわかっているんじゃないでしょうか。」

「・・・なるほど、俺を作り出した想像主か。」

「そういうことです。」

ラプソディはコレージの能力を知っているため、特に不思議に思わず普通に会話をしていた。

「だがそんな想像主が、こんな所で何をしてるんだ？」

「自分は今夢を見ているため、楽しむだけ楽しんでいるんです。先ほどストレンジャー君達にも会いました。」

「そうか、夢なのか。」

「そういうこと です☆」

ラプソディはそう言うと、コレージに段々と近づき、ストレンジャー達同様に抱きついた。

コレージはラプソディがやろうとしていた行動がわかっていたため、特に動揺せず好きにさせた。

「うーん。 やっぱりかっこいいなー おまけにスタイル抜群☆」

「マスターの作った存在だからな。 好みなのは当たり前だ。」

「そうですね。」

ラプソディはコレージから離れた。

「あまり交友的じゃないことも存じているので、そろそろストレンジャー君の所へ戻りますね。会えてよかったです。」

「また会える事を楽しみしてるぜ。」

「嬉しい。 ありがとうございます。」

ラプソディはそう言うと、傘を開き空へ飛んで行った。

コレージはラプソディが見えなくなるまで見送っていた。

ラプソディがストレンジャーの家へ戻ると、家の前にストレンジャーとビリーブが立っていた。

「あ、帰って来ましたよ。」

「マスター」

二人は手を振って出迎えた。

「ただいまー」

ラプソディはそんな二人の近くへ降り立つと、傘を閉じた。

「お待たせしてすみませんでした。」

「気にしないで。今出てきた所ですから。」

「じゃあテイルス達に会いに行こうか。」

「はい。」

三人は歩いて泉の庭園へ向かって行った。

そしてワープゾーンを開き、テイルス達のいるミスティックルーインへ向かって行った。

ミスティックルーイン

しばらくワープゾーンの中を飛び、三人はミスティックルーインに到着した。

「到着ー」

「うわぁ、やっぱりこの風景でテイルスさんが住んでるんだ。 自然がっばい☆」

ラプソディは嬉しそうに辺りの風景を見た。

「あそこの工房に住んでるんだ。 テイルスは。」

「本当ですか！！ テイルスさーん☆☆」

ラプソディはまたしても瞳を輝かせ、テイルスの工房へ一直線に走っていった。

「あ、また行っちゃいましたね。」

「この様子だと、俺達と同じことになりそうだな。」

ストレンジャーとビリーブは軽く会話をしつつ、ラプソディの後を追いかけた。

ストレンジャー達が工房へ付くとすでに工房の入り口は開いており、襲撃された後のようだった。
。

「ちょっと遅かったか。 テイルスー」

ストレンジャーは工房内を見た。

するとそこにはラプソディに抱きつかれその場で振り回されていたテイルスがいた。

「きゃーー☆☆ 本物だフワフワだ可愛すぎる~~~~☆☆☆☆☆」

「うわぁあーーー！！！！」

テイルスは急にやってきたラプソディに好き勝手回され、目を回していた。

「おーい、それくらいにしとけマスター」

「あ、ごめんなさい！」

ストレンジャーがそう言うと、正気に戻ったラブソディは一回止まり、逆方向へ1回転した。

「テイルス、大丈夫か？」

「う、うん。 いらっしゃいストレンジャー、ビリーブ。」

回転は止まり、あまり酔っていない様子のテイルスはストレンジャーとビリーブに挨拶した。だがラブソディに抱かれたままだった。

「あの、この人は？」

「俺たちのマスターだ。 名前はラブソディ・ウルフっていうんだ。」

「マスター？」

テイルスは少々疑問に思いつつラブソディを見た。

「始めまして、ラブソディ。」

「わああ、テイルスさんに名前呼んでもらっちゃった☆☆☆ うれしいー」

ラブソディはテイルスを離し、顔に手を当てつつ喜んだ。

「ええっと、この人どうしたの？」

テイルスに名前を呼ばれ、嬉しそうにしているラブソディを見つつ、テイルスはストレンジャーに問いかけた。

「ちょっといろいろと訳有りだな。 話すと長いんだ。」

「そうなんだ。 . . .ストレンジャーも同じことされた？」

「まあな。 何でもかっこいい&かわいい人には目が無いみたいなんだ。」

「特にストレンジャーさんがお気に入りなんです。」

三人はラブソディの様子を見つつ言った。

「うーん。 テイルスさんにあえて幸せ☆ おまけに名前まで呼んでもらえちゃった☆ 一生物だね♪」

「それは良かったな。」

ストレンジャーはラブソディに言った。

「でも、そろそろ時間切れかな・・・」

ラブソディがそう言うと、体から段々と光の粒子が出始めた。

「もう朝が来るみたい。 残念だな・・・」

「もうお別れなんですか？」

「多分そうですね。」

ビリーブがそう言うと、ラブソディは少々残念そうに言った。

「でも最後に行っておきたい所があるんだ。 スtrenジャー君、テイルスさん。 来てもらえますか？」

「ああ、いいぜ。」

「僕もだよ。」

ラブソディに頼まれ、二人はOKを出した。

「ビリーブさんもいいですか？」

「もちろんです。」

ビリーブも同様にOKを出した。

「じゃあ、ミドルガーデンまでお見送りお願いいたします。」

「OK！」

話がまとまり、4人はミドルガーデンへ向かって行った。

ミドルガーデン

4人は空を飛び、ミスティクルーイン周辺にあるミドルガーデンにやってきた。

「わああ、ここも自然がいっぱい☆ さすが狭間の庭園！」

ラブソディは草原の上でゆっくり回転しつつ言った。

「ここもマスターが作った所なのか？」

「そうですよ。 ミスティクルーインやオリエンタルシティなどは違いますが、ここは自分が作った庭園です。」

ラブソディはストレンジャーの方へ振り返りつつ言った。

「今日は皆さんに会えてよかったです。 とっても楽しかった。」

「俺たちも楽しかったぜ。 若干いろいろあったがな。」

ストレンジャーは苦笑しつつラブソディに言った。

「ゴメンなさい。 気分屋が過ぎましたね。 もっと冷静にならなくっちゃ。」

「僕達も楽しかったよ。 あえてよかった。」

「自分もです。」

「テイルスさん。 ビリーブさん。 ありがとうございます。」

ラブソディは改めてお礼を言った。

「ストレンジャー君。」

ラブソディはストレンジャーのそばへ寄りつつ声をかけた。

「コレを。」

ラブソディは持っていたアクセサリーを出した。

それは小さな白いクリスタルクローバーだった。

「これは？」

「自分が作ったクローバーです。 コレを皆さんに持っていて欲しいんです。 全部で6つです。」

「って事は、俺にビリーブ。 アルドールにピスフリーにジョイにコレージか？」

「はい。」

ラブソディはビリーブに1つ。 残りの5つをストレンジャーに渡した。

「自分が作り出したとはいえ、作り出した張本人の記憶が無くなれば皆さんの存在が無くなってしまいます。 そんなことが無いために、再会の兆しとして持っていて欲しいんです。」

「あの時と同様だな。」

「自分はそんなことは無いと信じています。 ですが無いとは言えません。 自分も作られた存在ですの。」

ラブソディは出続ける光の粒子と共に言った。

「わかった。 その願い、叶えるぜ。」

「ありがとう。」

ラブソディはストレンジャーに優しく抱きついた。

「また、会いに来てくれ。」

「必ず。 会いに来ます。」

ストレンジャーはラブソディに。

ラブソディはストレンジャーに言った。

「それでは皆さん。 ありがとうございます！」

ラブソディはそう言うと、光の粒子がラブソディに集まり、その中から出てきたランプのマー

クと共に消えてしまった。

「ストレンジャーさん。」

ビリーブは貰ったクローバーを破魔矢につけ、ストレンジャーを見た。

「俺たちにはまだ、することが残っているみたいだな。」

「ストレンジャー」

「テイルス。」

ストレンジャーは貰ったクローバーの1つをリストバンドに入れ、テイルスの方へ振り向いた。

「また会えなくなる日々が多くなると思うが、待っていてくれ。絶対に泣かせないから。」

「もちろんだよストレンジャー。」

「マスターのためにも。願いを叶えるんだ。絶対に。」

ストレンジャーは貰ったクローバーを見つつ、誓った。

— E N D —